子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2003年1月　NO.111

「ぼたん雪」　和田　薫

〈もくじ〉

歌劇「カルメン」を観て……向原　寛　2
音まで聞こえそうで…　……山本一力　3
市民で成功させたコンサート！……土居貴之　4～5
高知女子大学県民開放授業……水谷洋一　6～7
〝ともしび〟に魅せられて……宮田和幸　8～9
惜しい〝知性〟逝く……渡邊　進　10～11
ぼくが父親になったとき…　……佐藤伸治　12
地域社会の再生と地方自治㈢　……根小田渡　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

歌劇「カルメン」を観て

向原　寛

世界三大オペラといえば、プッチーニの「蝶々夫人」、ヴェルディの「椿姫」、ビゼーの「カルメン」。

その歌劇「カルメン」が、よさこい高知国体閉会式があった十月三十一日の夜、高知市文化プラザ大ホールで、「かるぽーと開館記念事業」として、二日間にわたってダブルキャストで上演された。

高知少年少女合唱団が賛助出演した

今回上演された「カルメン」は、ヨーロッパでも伝統のあるハンガリー国立歌劇場約二百名の総力を挙げての引越し公演で、全国十九カ所を約一カ月にわたり、二十三回上演というハードスケジュールで行われた。四国ではかるぽーとの公演が唯一であった。しかも、高知で外国の歌劇場の本格的なグランド・オペラが観られるのは、有史以来初めてとあって、県音楽ファンの期待は大きいものがあった。

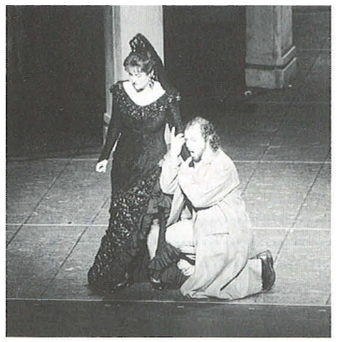
総合芸術としてのオペラはたくさんの人手とお金がかかるので、そう簡単には上演できない。ことに文化活動資金の弱い地方ではなおさらのことである。

昭和五十年、高知にもオーケストラピットを持った本格的なオペラが上演できる県民文化ホールが設立された。しかしこれまでに、そのオーケストラピットを使って上演されたオペラは、藤原歌劇団の「蝶々夫人」、文化庁移動芸術祭のオペレッタ「メリー・ウイドー」、県民挙げての、よさこい節「純信・お馬」、そして「魔笛」。数えればそれぐらいである。

その間、外国の移動公演や国内オペラ団体から地方公演の話が、県や新聞社にあったと思われるが、実現できなかったのが現状である。その大きな理由はオペラファンが県内に少なく、事業として成り立たないということではなかろうか。

オペラファンを育てるには、やはりなんと言っても生の本格的なオペラを、県民が度々観て感動してもらうことだ。そのためには、誰でも気持ちよく心をときめかせ、抵抗なくオペラの世界へ入っていける、ストーリーと音楽の良さを持ったオペラの上演が必要である。

「カルメン」は神話や歴史物語でなく、本能に従い自由奔放に生きる官能的なカルメン、社会のしがらみに縛られているドン・ホセ、清らかな愛を寄せるミカエラ……。それぞれの愛がどこにでもある現実的なものでありながら、人間の生きる永遠のテーマとして描かれているからである。さらに今回は、レチタティーヴォ、つまり〝叙唱〟のやり取りが両側の字幕にでて、よりよく理解できたことも大きい。このようなことから、一口で言って、誰でも素直に感情移入できる「オペラ」こそ、オペラファンを増やすオペラと言っていいのではなかろうか。


クライマックスのカルメンとドン・ホセ

「かるぽーと開館記念事業」として大成功だったオペラ「カルメン」。こんな生きる喜びを私たちに与えてくれるオペラを、音響のいい高知市文化プラザ大ホールで、市の特別事業にして年に一回くらい、しかも入場料を安くしてぜひ開催してほしい。この事業の企画継続が、県オペラファンの増加、ひいては県芸術文化の向上、そして地元オペラ活動の発展のパワーに繋がるものと信じている。

（むかいはらひろし／高知大学名誉教授）

音まで聞こえそうで…

山本一力

こども時代の記憶は不思議だ。

わたしが高知に暮らしていたのは、昭和二十三年から三十七年までの、十四年間である。

上京した昭和三十七年から数えても、すでに四十年が過ぎている。それなのに、日を追うごとに、当時の暮らしの細部をありありと思い出してしまう。

それが不思議でたまらない。

直木賞をいただいてから、高知に帰る機会が増えた。さほどに自由な時間の持てない、せわしない帰郷だ。それでも限られた時間をやりくりして、帰高のたびに町を歩いている。

建物も町のたたずまいも、大きく変わった。ビルが増えた代わりに、空き地や原っぱがほとんどなくなっている。

こどものころの記憶を頼りに、昭和三十年代に暮らした町をおとずれた。もちろん町は、すっかり表情を変えていた。

油の音をジュウジュウいわせて、朝からてんぷらを揚げていた平屋は、六階建てのマンションに生まれ変わっていた。

あの玄関のところで、いっつもおばちゃんがてんぷらを揚げよったに……。

昔の面影がまったくないマンションの入口を、わたしは見詰めた。

五円玉一個を握って、ほぼ毎日、その店に通ったものだ。

買うのはコロッケか、竹串に差したジャガイモのてんぷら。季節になれば、エンドウ豆のてんぷらもあった。

おばちゃんの機嫌がいいときには、形が崩れて売り物にはできない、アジフライをおまけにくれたりした。

長い菜箸を器用に使い、コロッケをくるっと裏返す。その都度、揚げ物が美味そうな音を立てた。

熱々のコロッケに、ウスターソースをチョロッとかけたものを、新聞紙で作った紙袋に入れてくれた。油とソースが紙に染みて、じわじわと模様を描き出す。

早く食べたいわたしは、おばちゃんからひったくるようにして紙袋を受け取った。

コロッケの衣は、水に溶かしたメリケン粉と、パン粉。中身は下味のついたジャガイモに、米粒のような肉のかけら。ただそれだけの、まことに素っ気ないコロッケだった。

たかだか五円のコロッケである。

使っていた油も、大して上物ではなかったと思う。こどものわたしにも、使い続けの油が発する、いやなにおいが感じられることもあった。

ところが、揚げ立ては美味かった。

マンションに変わった玄関先を見詰めていると、てんぷら屋のおばちゃんの顔の、ひたいの染みまで思い出すことができた。

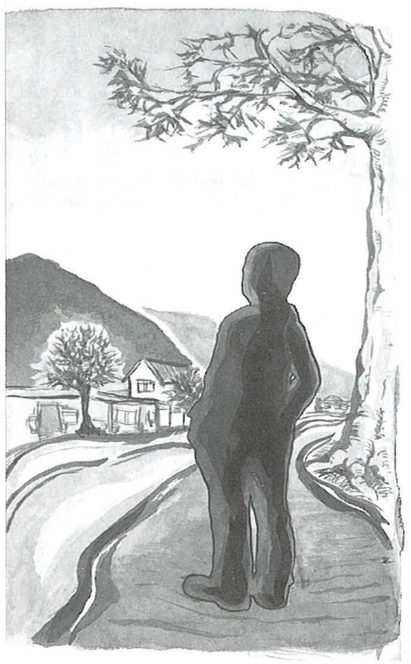
口の中には、コロッケの味が広がり、耳には揚げ物が立てる音まで聞こえた気がした。

あの日から四十余年が過ぎている。

かつての面影など、もはやなにもない場所に、わたしは当時の細部を思い描いていた。

記憶とは、まことに不思議なものである。

（やまもといちりき／作家）



市民で成功させたコンサート！

Jazzchor Freiburg　コンサート　イン高知

土居貴之

十月二十九日の十二時十分。高知空港にドイツから素晴らしい連中が降りたった!!

〝Jazzchor Freiburg（ジャズコア フライブルグ）〟。ドイツ国内はもとより、世界各地で高く評価されている、ジャズを独自のアレンジで表現する、市民が主体のコーラスグループである。メンバーの中には一年半ぶりに再会する友人もいる。「とうとうこの日が来た！」。グループを目の前にして実感が湧いてきた。

思い起こせば…

――ちょうど一年前の十月頃、ドイツはフライブルグに暮らす友人から、「来年の秋頃、日本で公演する。四国という島でも松山と鳴門でコンサートをするんだ」というメールがやってきた。内心、『高知でも公演があればいいのに……』程度に思いながら、「なんで俺のおる高知へ来んのや！」という内容のメールを返信した。これが今回のことの始まりとなったのである。

後日やってきたメールには、「じゃあ、高知での公演を主催してくれる？　それとも主催してくれるところを紹介してくれる？　わたしたちは期待している」ときた。はっきりいって動きが止まった。その後いくつかのやりとりを経て、彼らにとって三度目の日本ツアーに、高知公演が正式に組み込まれてしまったのである。

ちょっと考えないといけなかったのは〝自分にはコンサートを主催するための経験もノウハウもない〟という基本的なこと。しかも具体的な公演日が決まってないうえに、なんとその頃高知では「国体」があるではないか！　それでも『国際交流に結びつけてなんかやってくれんかな？』と淡い期待を抱きながら、県庁や新聞社に相談に行ったところ、「市民のグループを迎えるのなら、市民で実行委員会なんかをつくって迎えたら？」とアドバイスをいただいた。これには「なるほど！」と納得した。そこで、仕事を通じて知り合った人や友人などに声をかけていったところ、すぐに「おもしろそう」と十人を超える人たちが集まってくれたのである。

正式には去年の一月に〝『Jazzchor Freiburg（ジャズコア フライブルグ）』を呼ぶ市民の会〟という名称で実行委員会が立ち上がった。メンバーには高知のデザイン事務所に勤める人や行政で働く人、マスコミの人に、様々な市民活動に携わってきた人……という高知のいろいろな分野で活躍する人たちが「高知公演を成功させよう！」と参加してくれたのである。最終的には二十名を超える実行委員会となった。その後はそれぞれの仲間が、各々の得意分野を活かして奔走することとなったのである。

例えば、デザイン事務所から参加してくれている人は、ポスターやちらしの製作にあたり、行政に勤めている人は、各種手続きなどのチェック。コンサルタントに勤める人は県や市などが用意している各種補助金の中から、もっとも有利で趣旨の合う補助金を探し出してきてくれた。他にも、何か催し事があり人の集まる場所があると、それぞれの委員で役割分担をして〝体当たりＰＲ活動〟に出向いた。

こうして少しずつではあるが、「おもしろそうな公演があるね」といった反響を得ていくこととなった。自分など途中から『これはいける！満員のホールも夢ではない！』と妄想を見るようになり、他の仲間から落ち着くようにたしなめられたりした。

実行委員会によるＰＲ活動には、プレイガイドでの販売とは違った〝別の良さ〟があることがわかった。グループについて〝どんな公演をするのか〟〝どんな楽しさ、素晴らしさがあるのか〟といった情報を直接人々に伝えていくことができるのである。そしてそれを納得してくれた人がチケットを買ってくれ、さらに知人に同じように伝えていってくれるのである。チケットをＰＲする際に〝想い〟を伝えることができるのだ。お金がないところからスタートして、常に「赤字が出たら……」というプレッシャーを持ちつつ、それなりに汗をかいて少しずつ目標に近づけていったのだ。

実は一時期、日本ツアー自体が危ぶまれた時期があった。それは当初予定していた松山市が公演受け入れをキャンセルした時である。

「どこか他に開催できる場所はないのか？」とドイツ側と連絡を取り合いながら探していた。そんなある時、室戸市の人々と会っていて、「実は……」と困っていることを伝えた。すると、「そりゃおもしろい！　なんで早う言わん！」と、とんとん拍子で室戸公演開催に結びついていったのである。もちろんこちらも室戸市民が集まっての主催である。高知県人の自分が言うのはおかしいが、高知県には他の県にはない何かしらおもしろいと思ったことに対する〝イキオイ〟のようなものがある気がする。

そしてついに…

――公演当日。自分の妄想どおりに、三階席までたくさんのお客さんで埋まったかるぽーとの大ホール。そして相変わらず、客席と一緒になって楽しもうとするグループの公演。

自分は役割上、客席でゆっくりと鑑賞というわけにいかなかったが、舞台袖にいながら『会場全体すごくいい雰囲気だなあ』とうれしくてしようがなかった。お客さんを満足させるのはグループの仕事。そのグループが満足いく仕事ができるように、裏で支えるのが自分たち実行委員会の役割。

公演後、指揮者のベァトランドさんが、「すばらしい！　すばらしいぞ今夜の公演は!!」と手を取って喜んでくれたことを本当にうれしく思った。グループのだれもが、「高知のお客さんはいい雰囲気だ」と素直に喜んでくれている。タップダンスを披露してくれたミリアムさんは「日本でこれだけ広々と大きく踊れたのは初めて！」とかるぽーとの舞台に感激している。高知公演はグループにとって、過去の日本における平均の三倍以上の観客動員数という結果につながった。室戸でも、知名度のないグループの公演というのに、地元の人も驚く数のお客さんが足を運んでくれた。

リーダーのフローリアンさんが「高知は今までの日本のどこともの雰囲気が違う。また日本に来るときには、この実行委員会で主催してくれるか？」と言ってくれた。県庁や新聞社の方のアドバイスどおりになったのだ。『ここまでやってこられて本当によかった』と思った。ドイツのみんなに高知のパワーを見せつけたことは間違いない。

とにかく、自画自賛百連発ではあるが、高知と室戸の市民の力でそれぞれの公演を成功させたことはすごく自信につながった。ここでいう市民とは、実行委員会のメンバーだけでなく、あたたかくわたしたちの活動を助けてくださった様々な人々や団体も含めてである。

この公演を通じて知り合うことのできた人々は、これからの自分にとって宝物である。このような人のつながりが少しずつ大きくなり、楽しいことにどんどん取り組んでいけば、本当の意味での〝まちづくり〟につながっていくことだと感じる。

また、みんなで一緒に何かやりたいなあと思う。

どいたかゆき／「Jazzchor（ジャズコア） Freiburg（フライブルグ）」を呼ぶ市民の会
こうち・むろと代表

高知女子大学県民開放授業

水谷洋一

高知女子大学文化学部では昨年の十月に県民開放授業を始めました。「県民開放授業」という言葉は聞き慣れない言葉ですが、一般の社会人が学生と一緒に大学の授業を受講するというものです。それに先立って、この制度の説明会をしました。そのとき、受講希望者から「どうしてこのようなことを始めたのか」という質問がでました。

これは私たちの大学開放活動の一環で、生涯学習に対する社会的な要請に応えようとするものです。

勉強したい人がいて、そこに大学があるのなら、それを利用できない方がおかしい。大学が次代を担う人たちを教育することは重要な任務ですが、十八歳から二十二歳の学生でなければならない理由はありません。いつでも勉強したいときに、勉強できるのが望ましいはずです。さらに、社会経験を積んだ人がもう一度大学で勉強をするとき、その勉強はずいぶん深いものになるはずです。

またこの制度は登校拒否やその他のやむを得ぬ事情で、受験競争の戦列から離れた人や大学を中途退学した人に対して、もう一度高等教育の機会を提供できる可能性も持っていると考えています。

もう一つの目的は異世代間の交流です。十八歳から二十二歳の学生だけが隔離される必要はないのではないか。世代の違いは文化の違いと言えます。したがって、異世代の交流は内なる異文化交流でもあるはずです。そして、前の世代が大切にしていたものを次の世代が受け継ぐことは世代間の断絶を和らげることにもつながるでしょう。知的好奇心という共通点で様々な人が大学の中で交じり合うことはたいへん愉快なことだと思っています。

この県民開放授業は純粋に「知りたい」という欲求に応えることを目的としています。学歴とか資格とか肩書きとかといった目的のためではありません。私たちはこの目的を実現するために障害となるものを排除しました。したがって入学も卒業もありません。年齢や性別による制限もありません。また入学試験もありません。受講するに必要な基礎知識があるかないかは受講者自らが判断します。期末の試験もありませんから、単位の認定もいたしません。そして受講料も高知県の粋な計らいで無料となりました。受講したからといって目に見える何かが得られるわけではありません。知のために知を愛するという意味では本来の大学のあるべき姿かもしれません。

しかし、いつまでもこの目的が維持できるかどうかわかりません。またそれが今の社会に合っているのかどうかもわかりません。将来は受講料を支払ってもらい、試験をし、単位を認定し、その単位を積み重ね、学位を取得するという道も考えられます。今後この県民開放授業がどのように発展していくかは受講者が何を望んでいるかにかかっていると思います。

今回、開放した講義の数は三十三講座です。「土佐の祭り―「神祭」論」「NPO学」「変わりゆく都市と田舎の関係」「カルチャーギャップ学―日米法比較」「ジェンダー論」「源氏物語を読む―松風巻」「アメリカ文化を知る」「自己表現のための英文法」「西脇順三郎と現代詩」「写真に見る心身表現」「音楽療法の世界」「国際理解のための教育」「徒然草を読む」などの三十三講座です。受講者は二十代から七十代まで。希望者は九十人ほどでしたが、最終受講者は七十人あまりとなりました。

十月に始めてから三カ月がたちました。いろんな方から「女子大はいいことをしてくれた」と言っていただきました。受講生からは「本当にありがたい」という言葉が返ってきています。病気のためにおやめになった方も「授業が面白くてたまらない。残念で、残念で」と言ってくださいました。

県民開放授業の受講生は生き生きしています。知的好奇心はすばらしいものです。授業が終わったあと、どっと質問が来るのも開放授業の特徴です。しかし、一番喜んだのは、授業を担当している先生方かもしれません。質問の内容が突っ込んだものがあり、授業がたいへん面白くなってきたという声があがりました。

それから、学生たちも一般の受講生を意識しています。学生だけの授業の場合と違って、熱心に発表するようになりました。もじもじしていた学生が意識して質問に答えようとしています。遅刻もなくなりました。休憩の時間には学生と受講生との間で話し合いが生まれるようになりました。こうして、教室の中に新しい緊張関係が生まれています。

しかし、私たちの第一の使命は学生を社会に送り出すことです。したがって、たくさん希望がありましたが、一クラス三名から五名ぐらいしか受講生を受け入れることができません。三月には新しい受講生を募集しますが、さらに多くの講義を開放して県民の要望に応えていきたいと思っています。

県民開放授業の問い合わせ先
高知女子大学文化学部副手室
088―873―2764

（みずたにようい／高知女子大学文化学部長）

Original goods
横山隆一記念まんが館オリジナルグッズを取り扱っています。

Artist goods
県内で活動を続けている作家の作品を展示・販売しています。

Museum goods
まんが館にふさわしい、遊び心にあふれたグッズを取り揃えています。

Ticket
県下の文化施設で行われる様々なイベントのチケットを取り扱っています。

MUSEUM SHOP
高知市九反田２－１
Tell 088－883－5052
高知市文化プラザかるぽーと ３階

高知市文化振興事業団

出版案内

※表示価格はすべて本体価格です。

中西安男著
やっさんの わくわく動物記
A5判・一九二頁
一、八〇〇円

山岡 浩著
高知の農業
A5判・二四八頁
一、八〇〇円

外崎光広著
植木枝盛の生涯
四六判・二六〇頁
一、九〇〇円

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ
A5判・一六〇頁
一、一六五円

山本 大著
幕末の青春―坂本龍馬の生涯―
四六判・一六八頁
一、一六五円

依光 裕編著
珍聞土佐物語 上・下巻
四六判・三九二頁 四〇八頁
各一、五五三円

外崎光広著
土佐自由民権運動史
A5判・四二四頁
二、七一九円

外崎光広編
土佐自由民権資料集
A5判・三四四頁
三、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩
四六判・二七八頁
一、七四八円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える
A5判・一八八頁
一、一六五円

筒井広道著
画帳の歳月
A5変・二五六頁
一、九四二円

高木啓夫著
土佐の芸能
B5変・三四六頁
四、八〇〇円

≒ともしび≒に魅せられて

宮田和幸

山田橋の近くの大正橋のたもとに、ぼくが「アンティークともしび」という名の小さな喫茶店を開いたのは、二十年ほど前のことだ。当時は古いランプを集めたアンティーク喫茶は、まだ西日本にはなくて、ずいぶんと珍しがられた。

市民劇場の舞台がはねた俳優さんが、普段着で立ち寄ってくれた。樫山文枝さんや長門勇さん、加藤剛さん、井上孝雄さん、作家の宮地佐一郎さんも骨董品が好きだった。

今はもう喫茶店は流行らない。帯屋町やはりまや町などの有名喫茶が次々と閉店する。ぼくの店にも往時ほどの人影がなくて、天井に一面に吊られたランプがひっそりと息づいている。

さわればこぼれそうなビーズのシェードは、貴婦人の部屋のもの。ガラス製の笠で乳白色に青リンゴ色の縁取りや、桃色の波形のヒダなどは愛らしい色からみて、部屋の主は黒髪に花かんざしだのリボンなどつけたお嬢さんのものではないかと想像する。

魚の吊り金具がついていたり、和紙の笠を粋にかぶった台ランプはどなたの趣味か。

百あれば百の物語をもつランプ。

ぼくのランプの最初の想い出は、六、七歳の頃のことだ。

母方の祖父の家が、杉並の久我山にあった。昭和二十年代、付近はまだ黒い土の畑だった。畑を曲がると、藪があって、手押しの共同井戸がある。小路地の切れ目にある竹の生け垣が、うちなのである。昔は井戸のあたりもそうだったけれど、祖父が亡くなったとき、蔵といっしょに売らなければならなかったと聞いている。

祖父は金をもうけることとは無縁の学者だった。寺子屋をつくり、近所の子供に学問を教えた。祖父は父が幼い頃に亡くなったので、ぼくは祖父の顔を知らない。

紺絣をきちんと着た祖母が、「ピカピカにするのですよ」と言って、ランプのホヤ磨きを命じる。

「油壺の下にはってあるシールをはがしてはいけません。作った会社の名前があるのだから。もしもこわれたら、持っていくんですよ。わたしに何かあっても、そうしてね」

くどいほど、祖母はぼくにそんなことを言い聞かせていた。

「おじいさんは、これで学問をしていたのですから。電気は嫌いだったんですよ」

幼いぼくにとっては切子ガラスの丸笠は磨きにくいし、緑色の油壺も割ってしまいそうで気を遣うだけだった。

「電気の方が明るいよ」

そう言うと、祖母はまじめな顔で否定した。

「いいえ。おまえにもそのうちわかります。電気なんか」

おばあさんは古い、と言いたかったが黙っていた。ホヤ磨きには小さい子供の手がすみずみまで届いて重宝だった。

祖父の書斎には紫檀の机があって、愛用のランプは、眼鏡や懐中時計といっしょに、そこだけ時がとまったようにその上に載っていた。柱時計の音が、しんとした部屋に響く。会ったこともない祖父が、あがってきて、書き物でもするのではないかと思えた。

ぼくが中学生の頃、祖母は亡くなり、東京のことではあったし、あのランプはどこへいったのか、よくわからない。

孫が学芸会で主役になるからといって、風邪で熱もあったのに、汽車や船を乗り継いでみにきてくれた祖母。うれしそうに笑っていた。子供の頃は身にしみていなかったが、結婚して自分も子供をもつ身となってみると、そんな祖母の思いもわかるのである。

あのランプは、祖母のこころだった。せっかく孫に託してくれたのに、当時はゆくえを気にかけることもしなかったが、今では悔恨として残っている。

三十年ほど前から、ぼくは明治のランプを集め始めた。吊りランプも置きランプも、またランプの笠も、国内のあちこちを探しにいった。いつだったか、ぼくは紫檀の机の上にあったランプとよく似た明治のランプをみつけた。同じものではなかったが、店先でほかの道具の間にのぞいているのを見たとき、迷子をみつけたような気がした。

ランプが「明るい」と語っていた祖父母の言葉の意味は、郷愁だけではないと思う。

寺田寅彦の随筆に、「石油ランプ」という作品がある。それによると、寅彦は田舎の隠れ家の灯りをランプにしたいと思い、東京のあちらこちらでさがした。大正十二年のことである。

すでに電気の時代であるから、ガラス屋の主人も「石油ランプはドーモ……」と当惑したような気の毒そうな顔をする。やっとランプをさがしだした寅彦はこう綴る。

「ランプの焔はどこかしっかりした底力をもっているのに反して、蝋燭の焔はいわば根のない浮き草のようにはかない弱い感じがある」

さらに寅彦の筆は、「現在の脆弱な文明的設備に信頼し過ぎている」のではないかと続く。この随筆の前文に、「今度の震災の予感とでもいったようなもの」があったと説明が書き添えてある。

電気というのは、祖父母にとっても得体のしれない「文明」への不安を感じさせるものだったのかもしれない。ランプを磨く、芯を切る。面倒だけれど、ランプには手作業のもつ、ひとの温もりの安心がある。そう伝えたかったのではないだろうか。

明治、大正、昭和へと、行灯からランプ、ガス灯、電気。文明はもうどこまですすむのか見当がつかない。

古いランプを眺めるとき、絣を着た祖母の「電気なんか」とつぶやく生真面目な表情が浮かんでくる。

命じられてはいないが、今ぼくはピカピカにガラスを磨く。明治、大正、昭和と灯り続けてきたホヤの中の焔が、あたたかく胸まで照らしてくれるのである。

（みやたかずゆき／古美術研究家・アンティークともしび店主）

明治・大正・昭和初期の照明群

惜しい〝知性〟逝く

渡邊　進

〝つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日今日とはおもわざりしを―〟と在原業平が詠んだように、訃報はいつも突然である。この秋、高知にとって惜しい知性を二人失った。外崎光広氏と関田英里氏である。

お二人の訃報もまさにそれだった。「まさかそんなに早く」と、報せをさえぎってみても、時間を後にもどすことはできない。自分自身の加齢のためかもしれないが、このころ訃報がよけい重く聞かれるようになった。

輪廻というのはサンスクリットでは〈流れる〉〈転位〉が元意だそうだが、人の世は昔からこうして離別を繰り返しながら時代を移してきたのだ。それにしても訃報はやはり軽いものではない。逝く人を惜しむ思いは切である。

関田英里氏は、高知大学の教授から人文学部長となり、さらに一九八三年から八九年まで六年間学長をつとめ、退官後は高知市立自由民権記念館の初代館長としてその基礎を築かれた。県の学界、文化界の重鎮である。

経済史と農業経済論が専門で、早くから土佐における「郷士」や「石高」の研究で注目された。現在における農業問題にも造詣が深く、高度経済成長のなかで激変していく農村問題の研究にも大きな業績を残す。

大学外での活動も幅広く、県の過疎問題協議会委員（会長）のほか幾つかの審議会、高知市関係では消費者保護会議委員（委員長）、商工業振興委員会（委員長）などこちらも多くの活動に携わり、大学を地域に身近なものとした。

高知市文化振興事業団との関係では、一九八八年から九〇年まで二年間にわたって、「文化とはなにか」からはじまって、「高知の文化の歴史的風土」「高知の文化を取り巻く現状」「文化施設づくりの新しい対応」など、高知県の文化を根底から考えていこうという「高知の文化を考える会」の座長をしていただいた。結果は『高知の文化を考える』（高知市文化振興事業団刊）にまとめて出版され、これほど徹底して高知の文化問題を論議したものはないということで好評をうけた。

著書には『高知県の歴史』（共著）、『高知県の社会―ミツマタとトウモロコシの村―』（共著）ともに高知市民図書館刊、『戦後日本の農業と農民』（共著）新評論社刊、『たたかい学ぶ教師たち』（共著）明治図書刊や高知県の流通機構と野菜生産、そして生産農民の階層分析の論述となった編著の『高知県施設園芸野菜の生産と流通について』全国農業協同組合中央会刊など評価をうけている。ほかに先年刊の句歌集『行秋』、折々に書かれたものをまとめられた随筆集『往時茫々』がある。

外崎光広氏は一九五四年十月に県立高知短期大学の専任講師として北海道から赴任し、六七年に教授になり、定年までつとめた。その間六九年十二月から七三年九月まで学長代理として短大運営に尽力された。また八六年の定年後は九一年まで松山大学教授として教鞭をとったが、最後まで高知を離れることはなかった。

土佐の自由民権運動や植木枝盛研究の第一人者であり、徹底した資料収集と厳密な史料批判、憶測を一切排除した綿密な考証によって、土佐の自由民権運動を「民主主義を希求する、先駆的で広範な政治・思想運動」として日本近代史に位置づけて、それまでの学界の誤りを正した功績は大きい。

土佐の自由民権については、戦前に平野義太郎が『ブルジョア民主主義運動史』のなかで「秩父事件こそ自由民権運動の最高にして最後の闘争形態」と規定して以来、「士族・上流民権」で民衆を裏切った運動であるとする否定的評価が支配的だった。これに対して高知での研究も十分でなく、あるものといえば偉人伝的なものが主で土佐における自由民権運動の体系的著作はないに等しい状況だった。「自由は土佐の山間より」をことあるごとに叫ぶわりには、郷土で繰り広げられた自由と民権の闘いを正当に評価させるための理論化が弱かったのである。

家族制度の研究とそれを直接間接に礎石とした研究に、生涯情熱を傾注されてこられたのだが、自由民権の研究に興味を持たれたのは一九五五年に出版された家永三郎著の『革命思想の先駆者』（岩波新書）を読まれてからだと語られていた。

この家永本は当時ベストセラーになった本で、土佐の関係者のなかでも随分読まれたのだが、突出するように外崎氏を土佐の自由民権運動研究に傾注させた本当の理由は何だったのか。なんとなく外崎氏と土佐との因縁めいたものを感じるが、かりに外崎氏がいなかったら、多分の土佐自由民権に対する学界の偏見はいまに正されないままになっていただろうことを思うと、土佐にとって大恩人といえる。

また、一九八七年に高知で開かれた自由民権百年第三回全国集会に、延べ一五〇〇人の県内外の研究者、市民が参加する盛り上がりも実現しなかったろうし、高知市制百周年を記念して建設された高知市立自由民権記念館の建設意義を今ほどに深いものにすることはできなかったろう。

文字通り研究一筋の人だったので、論文、著作も多いが、これについてはすでに地元紙などに紹介されているのでそちらに譲りたい。

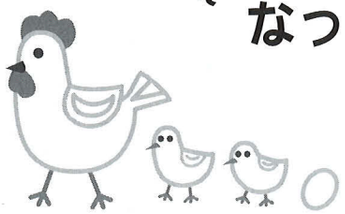
土佐と二人をみると、研究課題は違うが、〈土佐〉がテーマになっていることは共通している。頭に浮かぶのは〈土佐の中の日本と、日本の中の土佐〉ということである。どちらも土佐を超えている。かたや根っからの土佐人と、もう一人は土佐を愛しながら土佐とどこか距離をおいた存在であるところがおもしろい。

（わたなべすすむ）

自由民権記念館開館一周年記念講演会であいさつする関田氏（1991年3月31日）

自由民権百年第三回全国集会で基調報告を行う外崎氏（1987年11月21日）

ぼくが親になったとき…



佐藤伸治（サトウシンジ）

生まれたての赤ちゃんを育てる。みんな当たり前にやっていることではあるけど、いったいどうすればいいのだろう？　我が家は自分もお母さんも、両親が近くにいないこともあり、子育て経験者に頼ることもできず、不安だらけのまま赤ちゃんを家に迎えることになった。

最初に家に帰ってきて、用意していたベビーベッドに赤ちゃんを寝かせると、今まで抱かれていた感触が心地よかったのか、すぐさま赤ちゃんがか細い泣き声で抗議！　あわてて抱き上げるお母さん。少し落ち着いてやっと眠ったかなぁと、そーっとベッドに寝かせると、わずかな感触の違いを察知してまた抗議。今度はお父さんが抱っことといった感じで、何度目かのチャレンジでやっとベッドで眠ってくれたと一安心するも、今度は荷物を片づける物音で目を覚まし、またフギャー。結局この日はほとんど交代で赤ちゃんを抱っこし続け、その後もまるでカンガルーのように抱っこされ続ける甘えん坊赤ちゃんになってしまった。

この状態は、赤ちゃんが自分で動き回れるようになるまで続き、お父さんが仕事に出てお母さんと二人の時は、お母さんがトイレに行くにも抱っこされていたそうだ。

それ以外にもたいへんなことは盛りだくさん。ミルクの飲ませ方、おむつの替え方、お風呂の入れ方といった最低限のことは、入院中に看護婦さんに教わっていたのだけれど、実際にはしゃっくりがとまらなかっただけで「呼吸ができなくなる！」と真っ青になったり、お風呂に入れるのにも、爪を切るのにも緊張の連続。さらには敏感に泣き出す赤ちゃんのおかげで、夜に三時間眠れることがどれだけ幸せかを噛みしめる毎日。

二人以外に助けがいない、相談できる相手がいないという状況は想像以上に辛かったけれども、この辛い時期をなんとか乗り切れたのは、「赤ちゃんが自分の胸の中では安心して眠ってくれる……」という、なんというか、親として頼りにされていることを実感できたからだろうか。

最初のたいへんさは赤ちゃんの成長とともに少しずつ楽になり、ミルクを飲む量も増え、夜に寝てくれる時間も長くなってくれた。生まれたばかりの頃は、自分の意志を伝える術として泣くことしかできなかった赤ちゃんも、笑ったり怒ったりと、どんどん感情を表せるようになる。こちらも親としての経験を一つずつ重ねていき、赤ちゃんとの信頼も深まっていく。

一番最初に赤ちゃんができたという知らせを聞いたとき、父親になる喜びとはほど遠い、動揺の中にいた自分も、その数カ月の暮らしの中で、赤ちゃんから父親らしさを教えてもらっていたようだ。これから赤ちゃんが大きくなるにつれて、さらにたいへんなことが起こるたびに、また自分もしっかりしたお父さんに近づくことができるのかもしれない。

最後に。まだお父さんお母さんしか知らない赤ちゃんが、これから外の世界に出ていくのはなんとも心配で、できることなら家族三人で無人島なんかで暮らせたらなぁ……、なんて考えているうちは、まだ立派なおとーさんじゃない証拠だな、と思っているのが現在のぼくだったりする……。（とりあえず、完……かな）

（さとうしんじ）

地域社会の再生と地方自治（三）

地方自治の活性化のために―自治体行政と議会のあり方

根小田　渡

筆者は、地方分権そのものは、二十一世紀に避けて通れない課題だと考えている。では、地方分権あるいは地方自治の本来の意味とは何であろうか。

一つは、団体自治の側面からみた地方分権であり、国から地方へ行政権限や財源を移譲し、地方自治体が自らの判断と責任のもとに、自主性・自立性をもって地域の実情に沿った行政を行なうということである。いま一つは、住民自治の側面からみた地方分権であり、住民の意思と参加によってその地域を運営するということである。

残念ながら二十世紀末の日本における地方分権論議は、地方から、住民のなかから湧き起こってきたというよりは、やはり中央主導で上から提起されたものであったと言わざるをえない。そこに、日本の民主主義と地方自治が引きずっている「官治主義的伝統」を見ることもできるであろう。

政府・総務省などの「分権の受け皿として市町村合併が必要」という議論の背景には、自治体の行政能力に対する低い評価が抜きがたくあるようだ。実際、自治体の側に、そのように評価される行政の実態がなかったとは言えないのである。

それは、長く続いた中央集権システムのなかで形成された国＝頭脳、地方＝手足という依存関係であり、自治体のなかに見られる「国や県の指示・マニュアル通りに仕事をする」、あるいは「国から金が来るから仕事をする」というスタイルである。こうした中央依存体質はまた、地方における総与党・相乗り政治の増加と政策論争の停滞、地方政治の活力の衰退につながった。

地方分権時代を迎え、自治体にいちばん求められるのは、政策・企画立案能力（問題の発見と解決策の提案能力）と行財政経営能力であろう。地域社会、住民のニーズから出発し、住民の力と知恵を結集して具体的施策を考えていかねばならないから、先例踏襲型の発想ではやっていけず、リスク・試行錯誤もおそれるわけにはいかない。

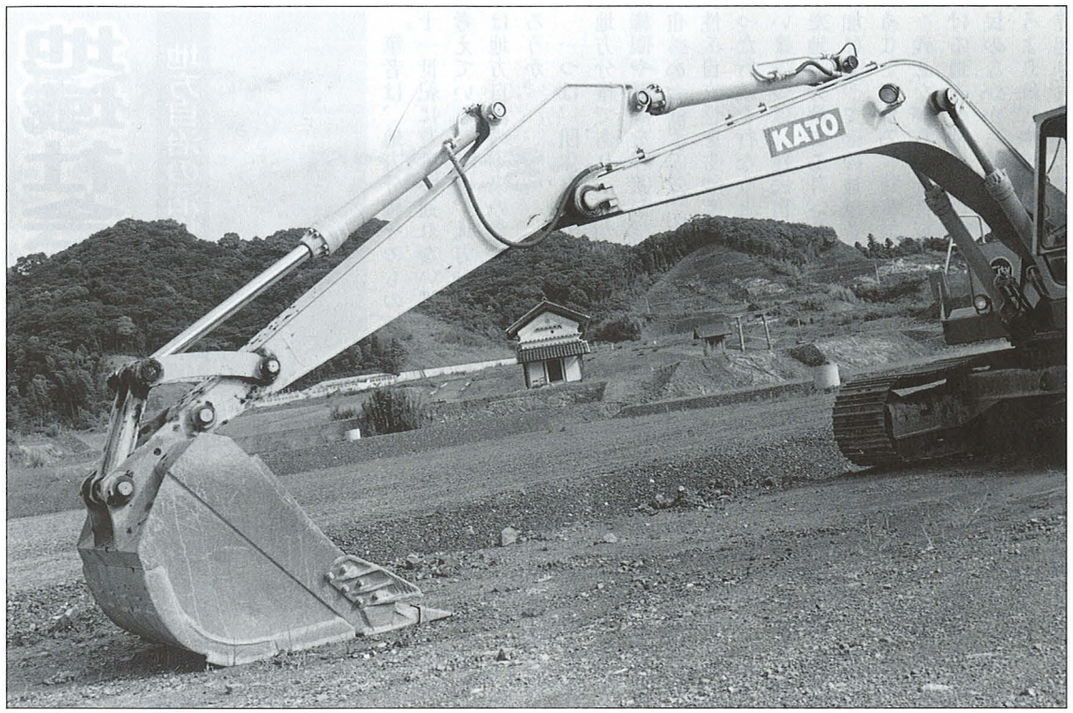
プランナー（仕掛け人）であり、プロデューサー（演出家）であり、コーディネーター（調整役）であるとともに、しっかりしたコスト意識＝費用対効果の感覚が求められるということになろうか。地方公務員採用試験のあり方をはじめ、人事政策の見直しも必要であろう。

行政サービスのコストを抑制するという点では、住民参加による住民の財政意識の向上や公私の守備範囲の確定（自助、共助〈互助〉、公助それぞれの守備範囲の確定）といったことも重要となろう。

そして、自治体が自己決定権をもつ政治の単位である以上、何よりも地域づくりのビジョンをめぐる論議が活発に展開されることが望まれる。執行部に対するチェック機能の面でも、政策提言機能の面でも、地方議会の存在意義が問われて久しい。

議会の停滞の原因としては、議員が「政策をつくる人」ではなく「行政への口利き役」や「利権の配分者」になってしまっていること、議会と執行部の間の癒着＝「しがらみ」などが指摘できよう。議会の刷新と活性化のためには、情報公開、住民投票、第三者委員会などを活用した議会外からの働きかけだけでなく、新しい自治の担い手が出やすい仕組み（例えば、議員のパートタイマー化や議会の土・日・休日開催など）も検討されてよいのではなかろうか。

（ねおだわたる／高知大学人文学部社会経済学科教授）



高知を撮る　**蔵は残った**（昭和62年　南国市）

第18回写真コンテスト入賞作品

吉村謙一郎

十市パークタウン造成の現場。
住宅や店舗が建ち並び15年前とまったく違った現在でも蔵は残り、時代の移り変わりを見続けている。

四つのバリアフリー

風俗歳時記

国体につづく、全国障害者スポーツ大会（よさこいピック高知）という流れのなかで、〈バリアフリー〉が頻繁に話題にのぼった。

高知新聞に報じられた、関連記事の見出しを列挙すると、「障害者ら70人歩行調査　高知市バリアフリー化へ点検」（8月2日）、「障害者用マップ作製へ　伊野商高生徒ら　高知市で現地調査」（8月20日）、「交通弱者の視点生かせ　高知市で国交省段差や点字ブロック点検」（8月27日）、「障害者への接遇学ぶ　商店街店員ら　アイマスクし介助体験　高知市」（10月22日）……という具合。

総理府（当時）が、一九九五年に発表した、『障害者白書』によると、バリアフリーには、次の四種がある。

1物理的な障壁、2制度的な障壁、3文化・情報の障壁、4意識上の障壁。

この分類にくらべると、段差や点字ブロックの点検など、バリアフリーの街づくりは、1に属する。

2は、障害があることを理由に、資格・免許等を制限すること。たとえば、かつては、聴覚障害者は、国家試験に合格しても、薬剤師免許は取れなかった。だが、平成13年に、制度が改められて、免許取得者第一号が誕生した。

3は、音声（点字）案内、手話通訳、字幕放送など、分かり易い表示の欠如。

4は、高齢者・障害者を弱者として捉える社会的偏見。これを打破して、お互いを対等な存在として認めるのが、〈心のバリアフリー〉。

本年10月に開催された、第六回障害者世界会議札幌大会のキャッチフレーズは、「なくそうバリア、ふやそう心のバリアフリー」であった。

よさこいピック高知においても、「広がれ心のバリアフリー」が、スローガンの一つとして掲げられた。

参考書＝もりすぐる著『バリアフリー入門』ほか。

（朴）

道路から見下ろすと小川の流れる公園がある。「潮江浦田川親水公園」として整備された緑と水の小さな空間は、広場や遊具もなく、植物とベンチと歩道だけが配置されている。大規模な工場に隣接しているが、どうやら野鳥たちにとってはかっこうの遊び場になっているらしい。つがいのメジロ、ヒヨドリ、サギ……何種もの鳥たちが訪れていた。残念なのは、撮影しようとつい近づきすぎ、飛んで行ってしまったことだ。

第13回 高知出版学術賞
推　薦　募　集

「高知出版学術賞」は、当該年度における最も優れた学術出版を顕彰することによって、学術研究の振興を図ることを目的とした賞です。該当図書について、皆様のご推薦をお待ちします。

【対象】

次の事項をみたすもので、高知出版学術賞審査委員会に推薦されたもの。

①高知県内に在住する者の学術的著述、または他県在住者で高知県に関する事項をテーマにした学術的著述。

②2002年中（奥付の日付による）に発行された単行本。

【推薦】

自薦・他薦を問いません。必要事項を記入した所定の推薦書に、該当図書2部を添え、審査委員会まで提出して下さい（図書は返却しない）。なお、推薦書は請求下すればお送りします。

【締切】

平成15年1月31日㈮

【表彰】

3点以内とし、それぞれの著者または編者に賞状と賞金10万円を贈ります。

【推薦・お問い合わせ】

文化振興事業団内
高知出版学術賞審査委員会

今号の表紙

「ぼたん雪」　和田　薫

私の家は南側が庭で、すぐ前が山であるから野鳥がよく飛んでくる。

数年前、元日に大雪が降ったことがある。その時、あのきれいな紅色のジョウビタキが庭の塀の上に留まっていた。思わず見とれているうちにその鳥は雪をけちらして山の方へ飛び去ってしまった。

雪の降る日の鳥、雨の日の鳥など、画を描いていると得がたい宝物のように思う。

（わだかおる・日本画家）

風伯

歴史の中で

歴史の授業で明治維新を習ったとき思ったのは、身分制度をはじめ社会構造の大転換に対し、一般庶民はどのような感覚でこれに馴染んでいったのだろうかということと、もし自分自身がこの時代に生きていたら、どう対応していただろうかという興味が大きかった。

敗戦という歴史的転換は体験したが、子供の頃ということもあり、さほどの切実感や苦痛は無かったように記憶している。周囲がすべて同じような状況であったから、それが当然なのかもしれないが、人間の順応感覚というのは、もともとこの程度ではなかろうかという思いが残ったのはかなり後からのことである。

世界の経済史の中でも珍しいほどの高度成長時代が終わり、第二の敗戦ともいうべき不況期になってから十数年を経過してしまった。もちろん、この間が無為無策であったわけではなく、政治家、学者、経済人等々の専門家が、それぞれの立場からいろんな方策を論じ、試みをしているが、いっこうに陽の光が見えてこないのはご承知のとおりである。

この歴史の中で生きている一人として、後世の歴史書にこの不況期がどう記述されるだろうかという興味は残っている。

しかし、残念ながら第一線に立つ企業戦士たちは、これを読むことはできない。（K）

文化高知 No.111 [隔月発行]
2003年(平成15年)1月1日発行
財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

第19回写真コンテスト 高知を撮る

作品募集

応募締切
平成15年1月31日(金)
発表 3月上旬、出品者に通知

このコンテストは、
過去から現在にいたるまでの
高知県内の出来事や風景、人々の暮らしなどを
写真で記録し、高知の様々な表情を伝えるとともに、
未来の高知のあるべき姿を考えていこうというものです。

□**テーマ** 「記録写真部門」
＊記録性を持った高知県に関する写真
(撮影時期を問わず)

「I LOVE 高知部門」
＊あなたの好きな高知県の風景・風俗等を
表現した写真(1年以内撮影のもの)

□**応募要領**

1) 応募はどなたでも、一人何点でも応募できます。
2) **出品料は無料**。(作品返却の際、郵送希望の場合は実費をいただきます。)
3) サイズは、カラー・モノクロともに254mm×365mm(**ワイド四ツ切サイズ**)以上とします。「記録写真部門」は発砲スチロールパネル貼りとし、「I LOVE 高知部門」は**パネル貼り不要**です。
4) 組み写真は3枚までとします。組写真の場合は、必ず順番と組写真であることを明記して下さい。
5) 規定の応募票に必要事項を記入し、作品の裏面に貼付して下さい。
6) 未発表の作品に限ります。ただし、個人的な展覧会などでの発表は除きます。
7) 特選及び準特選の著作権は主催者に帰属し(著作権法27、28条を含む)原版を提出していただきます。

□**賞** 「記録写真部門」
＊特 選 2点(賞状と賞金3万円、副賞)
＊準特選 10点(賞状と賞金1万円、副賞)

「I LOVE 高知部門」
＊特 選 1点(賞状と賞金3万円、副賞)
＊準特選 5点(賞状と賞金1万円、副賞)

入選は両部門合わせて70点以内

□**応募先** ＊高知県カメラ商組合加盟店または、フジカラープリント取扱店
＊高知市文化振興事業団企画事業課
(〒780−8529 高知市九反田2-1
☎088−883−5071)

□**主催** (財)高知市文化振興事業団

□**協賛** 富士写真フイルム株式会社

□**後援** 株式会社ラボネットワーク
高知県カメラ商組合

新たに I LOVE 高知 部門を設けました

あなたの「I LOVE 高知」を写真で表してみませんか。風景や生活の中の1シーン、人物など、愛する高知の一瞬を切り取ってください。何気なく撮っているスナップ写真は「I LOVE 高知」ではありませんか。あなたの大好きな気持ちを募集しています。